この絵、どこかでご覧になった覚えはありませんか。

つい最近私は、本校の教員数名と共に、巨大なこの絵を目撃してしまったのです。横浜の某ホテルの結婚披露宴会場で。

この絵を見た本校の教員曰く「おっ、教科書で見た。」とか、「資料集に載っていた。」などと申しておりました。もうほとんど職業病!?に近い状態です。

実は、本校の女性教員の結婚式にお招きいただき、横浜の海を見下ろすステキなチャペルでの結婚式の後、この会場に来たとたん、壁一面がこの絵。なんでもこの会場は、「ペリー来航の間」という名前だそうで、一同ナルホドと納得。

教科書等でおなじみのこの絵、気になったので後日調べてみました。（私もかなりの職業病のようです…。）

「ペリー提督横浜上陸の図」と呼ばれるこの絵は、一八五四年三月八日（嘉永七年二月十日）の十二時頃、ペリー提督一行が横浜に上陸して応接所に向かう場面を描いたものです。「絵」と言いましたが、ペリーの艦隊に随行した画家のハイネさんによる水彩画をもとにして、リトグラフの技師であったブラウン・ジュニアさんが彩色リトグラフで作成した一枚で、正式には「ペリー提督と艦隊士官が（日本）帝国委員との面会のために上陸する図」と言うようです。

沖に停泊する八隻の船の名前まで分かっていて、左からサラトガ号・サザンプトン号・ヴァンダリア号・ミシシッピ号・マセドニアン号・ポーハタン号・サスケハナ号・レキシントン号の順です。このリトグラフには八隻の船しか描かれていませんが、遅れてサプライ号が到着したので、全部で九隻が江戸湾に集結。幕府ににらみを利かせていたようです。

授業で習うので、六年生の子どもたちも「サスケハナ号（ペンシルベニア州を流れる川の名前から）」や、「日米和親条約」のように、テスト必出の用語くらいは今でも覚えてくれているとよいのですが。

日米和親条約が結ばれたのが一八五四年三月三十一日（嘉永七年三月三日）。今から百七十年以上前の三月の出来事なのですね。

このリトグラフには、犬も二匹描かれています。尾が短くなっていて、首輪もついているようなので、艦隊と共にやって来た犬だろうという説もあるのだとか。

完全武装した約五百人の士官等を引き連れて上陸したペリーさんが応接所に入ると、公式の会談が始められます。その合間に食事が供されます。料理を担当したのは日本橋の有名な料理茶屋「百川」。アメリカ側の三百人分とそれを接待する日本の役人二百人分の合計五百人分の料理が用意され、一人前は三両。

当時百川の料金は、最も安い物で一人千文。最も上等で二千文。一両は約六千文なので三両となると百川の最高料理の代金の九倍！今の金額にして約三十万円。五百人分で一億五千万円の大饗宴。

料理およそ九十種。菓子三種。大半は刺身・吸い物・煮物・焼き物で、アメリカ人の口に合うような油でいためた濃厚な味の料理は無く、肉料理は豚煮と鴨の二品だけだったようです。食文化の差もあるのでしょう。残念ながら、評価は芳しくなかったようです。

お式の日の我々はというと、このホテル発祥の料理だというシーフードドリアやプリンアラモードを含む多彩でおいしい料理を頂戴して大満足。本校の女性教員が、家族から今までどれだけ慈しまれ、愛されてきたのかがひしひしと伝わる宴でした。新婦からの両家のご両親へのお手紙。途中涙で声が詰まりそうになりながらも、気丈に読み切った彼女の職業病!?と、お嬢さんを持つ男性教員数名の滂沱（ぼうだ）の涙が印象的でした。二人のこれからの航海に、幸多かれと祈りつつ、「花嫁の父」の複雑なお気持ち、お察し申し上げます。

（立教小学校校長　田代　正行）